

第七回李登輝學校研修団レポート

力強く語る李校長の迫力に圧倒

青年部初代部長

早川 友久



東照宮をデザインしたパネルの前で修業式

五月末に李登輝前総統が訪日されてから初となる第七回台湾李登輝學校研修団（柳田敬一郎団長）が八月十六日から十九日の日程で開催された。研修会場となったお馴染みの桃園県龍潭の渴望学習センターには、李氏一行が訪れた日光東照宮をデザインしたパネルが掲げられ、研修団を歓迎した。

【第一日・八月十六日】

日本訪問についての感想も聞けるのではと期待を膨らませて日本各地から集まった研修生は総勢四十一名。桃園国際空港で集合した後、バスで一路台北市内へ。七回目の開催ともなると今回で二回目、三回目といった参加者も多い。それだけ実り多い内容だとい

ことだろう。初参加の私も自ずと期待が高まる。

最初の野外研修は五月に中正紀念堂から改名されたばかりの台湾民主紀念館。ちょうど「台湾の自由化と民主化特別展」が開催されており、国民党独裁時代に台湾人の中国人化に使われた教科書や冤罪の証拠となる資料等が展示されている。ここでは生粋の台北っ子である陳建中さん（大正十二年生まれ）がガイドを務めて下さった。日本時代も国民党時代も肌で知る陳さんは別れ際に「台湾はやっとここまで来ました。日本の皆さん、台湾を応援してください」と我々に訴えた。「日本が頼られているのだ」と強く実感する。

台湾民主紀念館を後にした一行は、

続いて立法院見学へ。立法院の紹介ビデオを視聴した後はなんと王金平・立法院長から直々の歓迎挨拶をいただくことに。王院長には三十分近くにわたり、立法院の現状や来年の立法委員選挙に伴う定数半減について説明いただき、質疑応答でも非常に丁寧に答えられた。終わってみれば一時間近くもお付き合いいただいた。

その後、台湾料理の名店「度小月」で夕食を摂った一行は、台湾名物の代格、担仔麵や魯肉飯に舌鼓。明日からの講義に思いを馳せ、宿泊先の圓山大飯店へ投宿した。

【第二日・八月十七日】

日本時代の偉容を今に残す總統府の見学から二日目をスタート。ここでも日本語世代のガイドさん二人に案内していただいた。總統府一階には、日本時代の総督十九人、独裁体制を敷いて台湾をほしのままにした蔣親子、そして李登輝前総統、陳水扁現總統に関する

る展示物が時代順に並べられ、併せて、日本時代の八田與一や「台湾水道の父」と呼ばれる英国人ウイリアム・バルトンの成し遂げた事業を紹介するパネルも展示している。ガイドさんの口から日本時代を含む「生の歴史」を教えられ、「今まで学校で習ってきた歴史は何だったんだ」と愕然とする日本人も少なくない。かく言う私がその一人だ。九十分程度の見学を終えると、参加者からは「時間が足りない。次回はもっとじっくり見たい」など積極的な感想が口々に飛び出した。

続いての研修は、台北市公館にある水道博物館。ここは日本時代に台湾初の水道施設として整備された場所ので、老朽化と新しい設備の建設に伴い、その役割を終え、一九九三年に台湾水道の歴史を語る博物館として公開されたもの。

「台湾水道の父」として知られるのはバルトンと助手の浜野弥四郎。領台当初に台湾へ赴任した二人は上下水道

の整備に尽力し、伝染病撲滅に寄与した功績に光が当てられ、近年、台湾の人々にもその名が知られつつある。

「その昔、不衛生だった水も、今では安全に水を使うことができるようになった。水を使うときには先人の苦労と水の大切さに思いを致さなければならぬことを表したのが、飲水思源」という言葉だ——これは今年の六月五日、秋田県田沢湖畔にある「飲水思源」の石像を見学された李登輝前総統の言葉。ここは正にその先人の苦労が偲ばれる水道博物館。役割を終えたポンプも大切にされていると見え、綺麗に磨かれて展示されている。

充実した午前の研修を終えた一行は昼食へ。小籠包の名店「鼎泰豊」の前では順番待ちの客が数珠繋ぎ。予約をしていたお陰で十五分ほどの待ち時間で入店できたが、一時間以上待つものしばしばだとか。

ちようど昼食を終えた頃から雨が落ち始めた。大型台風が近づいているの

だ。夕方からは交通に影響が出るかも知れないとのこと。スタッフ側で協議し、講師の先生が来られなくなる可能性もあるので、開講式を後に回し、講義を前倒しして始めることとした。

一行は渴望学習センターに到着後、すぐに林明德先生（国立台湾師範大学歴史研究所教授）の講義「台湾主体性の追求」を開始。台湾の歴史をわかりやすい日本語で語る林先生の講義が終ると、意気盛んな研修生から次々と質疑の手が挙げた。

一つ目の講義は無事終了したものの、大型台風はいよいよ風雲急を告げており、ますます勢いを増しているとのこと。次の講師の黄昭堂先生（台湾独立建国連盟主席）が到着次第、講義が始められるという慌しさだ。「台湾の対日・対米政策」と題した講義が始まったものの、のっけから「皆さん、何だか来年初めの立法委員選挙と総統選挙の方に関心が高そうなので、テーマを変えましょう」と太っ腹にも方向

転換。黄先生独特の名調子で笑いを交え、来年の選挙への展望と台湾の選挙事情を講義された。質疑に際しては数多くの手が挙がり、やはり選挙への関心の高さが伺えた。

【第三日・八月十八日】

今日も台風が居座っている。残念ながら講師の先生が来られない等の事情から幾つかの講義予定を変更。午前中は、李登輝前総統が推進した台湾の民主化の軌跡を辿るDVD「台湾民主化之道」を鑑賞。

二時間余りの記録映画だが、研修生はしわぶき一つなく映像に見入っている。民主化推進の陰に多くの反対勢力



立法院前にて 8月16日



林明德先生 8月17日



黄昭堂先生 8月17日



李清興先生 8月18日

を抑え、無血革命を成し遂げた李前総統の偉大さの一端を垣間見ることのできる素晴らしい映像だ。残念ながら、このDVDの監修をされた張炎憲先生（国史館館長）は台風のために研修所まで来られず、鑑賞のみに留まった。

だが、ここで嬉しい予定変更。毎回、李登輝学校研修団のガイドを務めていただいている勝美旅行社の李清興さんに、ご自身の体験を語ってもらおうというわけだ。戒厳令下に青春を送り、日本に関する書籍や新聞などが手に入りにくい中で、台湾を訪れた日本人の発音を聞いて必死に習得したという李さんの日本語はやや関西弁訛り。当時多かった関西からの旅行者の日本

語をそのまま身につけたから「もう直せない」と李さんも苦笑い。その達者な日本語で時にユーモアを交えながらも、やはり今思い出しても苦しかった国民党時代の思い出と、民主化を成し遂げた李前総統への感謝の言葉で李さんの緊急講義は幕を閉じた。

午後はタイヤル族出身の馬薩道輝先生「台湾原住民の発展」でスタート。岬の外れに住む馬薩先生は、台風で船が出ないために講義が危ぶまれたが、何とか波が収まったということで奥様を伴って駆けつけてくださった。領台当初、三十年近くも日本と戦いあった原住民が、後に日本と一心同体で欧米と戦ったという講義に深く考えさせら

れたというのは研修生の弁。

続いている講義は迫田勝敏先生（元東京新聞台北支局長）による「日本人の台湾生活経験」。実は迫田先生、最終日午前に講義が予定されていたのだが、台風の影響で予定されていた講師の先生が来られず、急遽前倒ししての実施。「今夜は台風なので家でゆっくり明日の講義の準備をするのにちょうどいい」と思っていたところへ「何とか前倒しを」との連絡が来たというところで苦笑い。講義では、支局長として台湾で生活した経験から、今も台湾に残る日本の断片を紹介したり、なかなか分かりにくい選挙の内幕、特に海外では全く報道されない里長（行政の最小単位・町内会長のようなもの）選挙などについて語っていただいた。

夕食を挟み、迫田先生も聴講して夜は黄天麟先生（元第一商業銀行頭取）の講義。元々は羅福全先生（亜東関係協会会長）との対談が予定されていたのだが、台風のため単独講義に変更。

紳士然とした佇まいはさすが財界の重鎮の雰囲気。馬薩先生といい黄先生といい、お年を召した講師の先生方がパソコンやスライドを多用して講義をされるのには驚かされる。グラフや写真を用いて少しでも分かりやすくという心配りに感謝。講義は専門の経済について。いまいち不可解な中国経済の裏側と台湾経済との関連について分かりやすく語っていただいた。

明日は研修最終日。台風も夜半には抜けるとの予報。李登輝校長の講義に胸を膨らませて床につく。

【第四日・八月十九日】

予報どおり台風一過。いよいよ李登輝校長の特別講義だ。本来なら開講式でご挨拶いただく予定だった郭生玉教頭先生の講話や、お世話になった渴望学習センターの方々の紹介が進む中、教室の外は何やら物々しい雰囲気。警護の警察官による安全チェックがすでに始まっているのだ。研修生も一旦退

出して検査を受けるようにとの指示。白内障の手術を受けてから初めて公の場に姿を見せられるということで、台湾のマスコミも集まってきている。

午前十時過ぎ、パトカーに先導されて李登輝校長が到着。悠々とした足取りの李校長は、目を保護するためにサングラスをかけられていたが、出迎えた私たちに「ご苦労さん」と大きな手で握手をしていた。

そして特別講義開始。「五月の日本訪問は大成功だった。靖国神社で兄に会うことができたし、奥の細道を半分だけが歩くことができた。東京湾があんなに綺麗になっていて驚いた。高速道路にもゴミひとつ落ちていない。進歩の中にも伝統を失わず、これほどまでに発展できた国は日本だけだろう」と語り始めた李校長が繰っているのは、原稿用紙にご自身で手書きされた原稿。灰聞あかみするところによると、李校長は常に旧仮名遣いの日本語原稿をご自身で書き起こされるという。自身の言葉

で語るから人を引き付けるのか、我々が李校長に魅了される一端がここにある気がした。汲めども尽きぬ講義の内容は訪日後の感想から日本文化、そして台湾の現状に至るまで多岐に亘り、いつの間にもやらず定の九十分が経過。「もう少ししゃべらせてよ」と漏らされた李校長に一同から拍手。

その後、研修の掉尾を飾る修業式。ここでは李校長自ら一人ひとりに修了証書を手渡していただく。修業挨拶では「実はこれが一番言いたかったことなのだ」と前置きして話されたのは「現状のまま推移すると、米国と中国が台湾を共同管理しようという話が出てくるかもしれない。そうなって



馬薩道輝先生 8月18日



迫田勝敏先生 8月18日



黄天麟先生 8月18日



李登輝先生 8月19日

からでは遅い。そのためには早く、この台湾に住む人々が『私は台湾人だ』『台湾は台湾人のものだ』という強いアイデンティティを持たなければならぬ。そうしなければ台湾は呑み込まれてしまう」と、力強く語る李校長の迫力には一同圧倒。「台湾共同管理案」というショッキングな話題には、空港へ向かうバスの中でも一頻り研修生からの意見が飛び交った。

李校長には昼食までお付き合いいただいた。デザートは、メロンやスイカなど数種類の果物を花びら状に切り取り、一輪の花のように並べたものだったのだが、李校長はそれを見て「いやあ、これはアイデアだなあ。こういう

創意工夫が大事なんだ」と話された。デザート一皿についても常に李校長が深く考察されていることを感じた一言だった。

私自身はじめて参加した研修団であったが、これほどまでに濃密な研修を今まで六度も見逃していたことを思うと何とも悔しい。一生の宝になる研修といっても過言ではないので、ぜひ参加されることをお勧めしたい。

末筆となったが、今回も研修出発前の八月三日、ご多忙を縫って研修生のために官邸で茶話会を開き、ご講話いただいた許世楷大使をはじめ、茶話会の準備していただいた代表処の方々に深く御礼申し上げたい。真多謝。